

■ ■ 研鑽する組織 「椿会」～資生堂の美意識の体現～

■ 資生堂が求めてきた理想の美のイメージを創出した「椿会」の全盛

第三次椿会 再現展 1 より

開催にあたって

資生堂の歴史は、1872年当時海軍病院薬局長であった福原有信が、東京銀座に洋風調剤薬局資生堂を開業したことに始まります。

1916年には有信の息子、福原信三が化粧品部を立ち上げ、現在に至る化粧品会社としての資生堂が誕生しました。

自らも写真家であった信三は公私両面で芸術を支援しましたが、1919年化粧品部に開設した資生堂ギャラリーは、わが国における最も歴史ある画廊として、戦前戦後を通じて数多くの芸術家に活動の場を提供することになりました。

今回資生堂アートハウスでは、戦後のギャラリー活動を代表する展覧会「椿会」のなかから、最も長期に亘って開催され、また、資生堂の美術品コレクションの中核となる作品が発表された「第三次椿会」（1974－1990）に的を絞り、奥村土牛、高山辰雄、岡 鹿之助ら開設時のメンバーのみで構成されている第1回展から3回展までを再現します。

これらの作家編成は、当時のわが国における具象美術界の一面を代表するものであると同時に、この時代の資生堂の美意識を体現するものでもありました。作品に通底する気品と優美、清調さをご鑑賞いただくと同時に、資生堂が求めてきた理想の美のイメージを感じていただければ幸いです。

2012年4月

資生堂アートハウス

## 《椿会美術展と資生堂》

資生堂のシンボルマークである「花椿」にちなんで命名された「椿会美術展」、通称「椿会」は、銀座の資生堂ギャラリーを会場に資生堂が主催しているグループ展です。第一次椿会は1947年に始まり、2010年に終了した第六次椿会まで、60余年亘り継続的に開催されてきました。

「椿会」の前身は、資生堂初代社長、福原信三が企画した「資生堂美術展覧会」（1928-1931）にあります。この展覧会は、芸術を支援し自らも写真家であった福原が第一級の洋画家たちに新作の出品を依頼した展覧会で、資生堂ギャラリーを会場に開催されました。新設時のメンバーは、福原の芸術に対する好みと交流が如実に反映されたもので、石井柏亭、岡田三郎助、藤島武二、金山平三、梅原龍三郎、安井曾太郎ら25名、所属団体も多岐にわたり、団体の枠や画壇での地位にとらわれることなく構成されているのが分かります。

この展覧会は1931年の第6回展まで開催され、その後不況のため中止となりましたが、ギャラリーの活動を通じて企業が芸術家を支援するという福原の理想が結実したものであると同時に、その精神は資生堂のポリシーとして戦後に引き継がれ、会派や地位にとらわれることなく選ばれた作家たちに自由な制作を擁護するという「椿会」の発足に繋がることになりました。

戦後発足した「椿会」は福原の理念を率直に受け継ぎ、資生堂が選んだ作家たちに新作を発表してもらうグループ展の形をとりながら、現在まで継続されています。

個々の展覧会については会場内に別にご案内しますが、今回の展覧会のタイトルにもある「第三次椿会」はその中であって最大規模かつ最も永く継続された展覧会で、1974年から1990年にかけて開催されました。発足時の日本画と洋画の構成に後には彫刻が加わり、展覧会が終了するまでの間に、日本画10名、洋画12名、彫刻3名、合計25名の作家がメンバーとして参加しました。

1993年から始まった第四次椿会からは従来の具象絵画や彫刻からは距離を置き、新しい価値観の創造を念頭に現代美術の展覧会へと大きく舵を切りました。この流れは、「第五次椿会」、「第六次椿会」へと継続し、来年度から開催予定の「第七次椿会」も、現代美術による展覧となる予定です。

表現様式が変わったとは言え、「椿会」が資生堂ギャラリーを舞台にして作家相互の研鑽の場であり、自由な表現が尊ばれる場であることに変わりはありません。これからも「椿会」は継続され、新たな芸術が創造される場、企業による芸術文化支援の場であり続けます。

## 椿会の思い出

椿会という展覧会は、今泉先生が本当にいい人選をなさってくださいましたと思います。皆が皆、信頼できるいい人ばかりでしたなあ。私はもう、楽しんで、楽しんで描かせていただきました。皆さんの気持ちも合って、非常に印象深い。良い展覧会でした。奥村土牛先生、岡 鹿之助先生、牛島憲之先生と…。それから、院展の岩橋英遠先生。(中略) 徹頭徹尾、楽しい楽しい展覧会で、皆もそのような気持ちで描いていらしたと思います。洋画の先生も人柄の良いお人ばかりでしたなあ。

あの頃は、私らみたいな日本画と洋画を一緒に展覧会するなんてことはめったになかったんでっせ。今泉先生という方がまた非常に高潔な、それでいて、温かい、いいお方でしたなあ、会の人たちが皆、今泉先生のお人柄を非常に信頼して、一緒になって会をやっていたという、そんなふうでしたなあ。今泉先生が亡くならはってしばらくしたら、やっぱり合わんのやなあ…。最初からのお人はほとんど出品なさらなくなってしまいましたなあ。不思議なもんですなあ。椿会は、私みな気張って描きましたから、この展覧会見に行きたいですなあ。(1998年)

「花鳥を描く 上村松篁」展図録 (1998年/資生堂アートハウス)

日々のなかでより

グループの展覧会というのは、大変有意義で、いいことであって、メンバーが決まります。ところが、それはなかなか難しいんですね。きょうもアルバムをちょっと覗いてみたら、私の好きな人というとおかしいけれども、全く信頼のできる方ばかりですね。それは、やはり今泉先生が、恐らく中心になってお集めになったんじゃないかと思うんですよ。今泉先生というのは、非常にお人柄でした。何か非常に信頼のできる特殊な存在だったように私は思っていますね。集められたお方々が、どうしてこんなにいい人……というとおかしいけれども、信頼のできる人ばかりよう集められた。

いいメンバーの、いい展覧会でございましたね。それは非常に難しいことだったと思いますよ。(中略)

岡鹿之助さん、温厚ないいお方やね。恐らく今泉さんと大変ご懇意やったように思う。それでおそらく岡さんなんかも参画されて、人選をなすったんやろうと思いますが、こんなにうまいこと信頼のできる人ばかり集まってくるということは、本当にあり得ないほどのありがたい、いいグループでしたね。

ちょっと忘れちゃったけれども、ある料理屋さん……吉兆さん……でね。私、こっち側におりまして、偶然向かい側に土牛先生が座られた。

こう(身振り)してね。「ねえ、上村さん、この椿会が立派に育つように努力しましょう

ね。努力しますよね。」とおっしゃるのですよ。大先輩ですえ。土牛先生は、私みたいなもんにね。そうおっしゃるの。びっくりしました。ありがたくて。

それで私もどんなことがあっても「椿会」には遅れんようにしようと決心しましてね。毎年楽しくかかせていただき、やっておりました。(1991年)

「今泉篤男と椿会の作家たち」展図録 (1991年/資生堂ギャラリー)  
「上村松篁氏に聞く」より

#### 椿会美術展

資生堂の椿会に参加することになったのは、今泉篤男先生にメンバーになるようにお声をかけていただいた、それがきっかけですね。椿会ってのはいい展覧会でしたから、我々若い者にとって参加できるのは嬉しいことだったんです。ですから今泉先生からお話があった時、とても嬉しかったことを憶えています。

今泉先生っていうのがまた素晴らしい先生でした。絵に対しての事柄は非常にはっきりしていましたね。あんな厳しい先生は、ちよともう今後は出ないんじゃないでしょうか。僕も叱られたことがありますよ。椿会の何回目かにどうしても時間が取れないことがあって「どうにも今度はできんが」って言ってましたら数々叱られましてね、「なんだ、そんなことで描けないなんてあるか」ってね。「そのくらいの情熱もたなけりゃ駄目だ」って、だけど、厳しいだけじゃない、すごく優しいんですよ。それはもう嬉しい叱られかたで、叱られて嬉しかったことを憶えていますね。それほど、椿会に愛情をもってくれて、それほど僕にも愛情感じてくださっていたような気がするんです。

お目にかかることも時々はありましたが、いつも優しく色々言っていただいたものですよ。椿会の作家の方達は皆良かったですね。油絵の人も皆、純粋な方が多かったような気がします。いわゆる嫌な感じの方はいなくて、ある種の、厳しさをもった作家を集めていたような気がします。それから特に奥村土牛先生が、お歳なのにもいつも美しい清らかな絵を出されていたことが記憶に残っています。土牛先生はとても人格者でしたから、我々としても一緒に並べさせてもらうのは嬉しかったんです。

院展と日展の違いはありましたけれど、展覧会の会場で時々お目にかかることができました。そういう時感じたのは、幾つになっても心の中は老人じゃないといえますか、初心な、清らかな、どんな時でもそういう印象が残る方でした。(1996年)

「高山辰雄展」 図録 (2007年/資生堂アートハウス)  
「画家のことば 高山辰雄インタビュー」より